

令和5年12月26日（火曜日）

高校生と姫路市議会との座談会（文教・子育て①）

総合福祉会館第2会議室

出席議員

石見和之、塚本進介、竹尾浩司、蔭山敏明、  
三浦充博、小田響子

出席高校生

淳心学院高等学校 2人、姫路女学院高等学校 4人、

開会

10時01分

委員長挨拶

10時03分

出席者紹介

10時05分

意見交換

10時06分

○個別テーマ

・不登校児童生徒への支援

「不登校の子どもたちも含め、誰もが質の高い教育を受けるためには？」

（委員長）

まず初めに、いろいろなテーマの中からこのテーマを選んだ理由を教えてください。

（高校生）

中学生のときに1人の生徒が不登校になって理由も分からず卒業してしまいました。なぜ不登校になってしまったのかという原因を知って、不登校になる人が少しでも減ってほしいと思ってこのテーマを選んだ。

（高校生）

私は中学受験をして今の中学に入ったが、地元の中学校では不登校の同級生が多かったと聞いた。直接話は聞いていないので、その心情などを知りたくて参加した。

（高校生）

特に義務教育の段階で不登校になって教育を受けられないと、社会で生きていくために必要な知識や協調性、道徳が欠けてしまう。不登校は真っ先に取り組むべき課題であって、他人事ではないと考えてこのテーマを選んだ。

（委員長）

身近に不登校の人がいたということであるが、その理由を聞いてみたことがあるとか、その人とのように関わってきたかなどを聞かせてほしい。

（高校生）

ゲーマーになりたいという昼夜逆転の生活になったり、中学校にあまり行ってなかった子が通信制の高校に行ったなどの話を親から聞いた。

（高校生）

今のクラスメイトで、体調不良で倒れて学校に行くのが不安になったという人がいる。中学のときはいじめや、インターネットにはまって学校に行くのもしんどくなったという人もいた。

（高校生）

中学の友人で、起立性調節障害で朝起きてても体調が悪く、学校に行きたくても行けない人がいた。

（高校生）

部活が嫌になって不登校になりかけた。友達も不登校気味になっていて、その子も部活動で嫌がらせを受けたと聞いたことがある。

（委員長）

議員の皆さんは不登校の生徒や保護者から相談を受け、助言等を行ったことはあるか。

（議員）

保護者からいろいろな相談を受ける。対人関係の問題や勉強の問題、部活動の問題等、それぞれ理由が違う。なぜ学校に行けないのかという理由を理解し、原因があれば取り除くことが大事である。先ほどゲーマーの話が出たが、今はeスポーツもあり、親世代と考えるにギャップもある。保護者が子どもの話をたくさん聞くとともに、いろいろな人の意見をたくさん聞き、子どもに対する理解を深めることで対応がよくなるのではないかと。

（議員）

私は不登校に関する相談を受けたことはない。

学生時代、学年に3人ほど不登校の生徒がいたが、中には大検を受けて医学部に進学した人もいた。

（議員）

不登校の生徒の保護者に心のケアについて相談できる窓口を紹介したことがある。不登校になると生徒本人だけでなく家庭全体がおぼつかなくなる。家族も含めて支援の手を届けられるようにしないといけない。

私の学生時代は、不登校の理由というといじめであることが多い印象だったが、今はさまざまなので、1人1人に寄り添っていかないといけない。

(委員長)

姫路女学院高等学校から資料に基づき提案を発表したいとの申し出を受けているので、説明を受けることとする。

【姫路女学院高等学校が資料に基づき説明】

(委員長)

作り込まれて考えられた内容だったと思う。意見や質問はあるか。

(高校生)

「思い切り泣ける環境作り」が良いと思う。「男なら泣くな」というイメージを取り払うことが大事だと思う。

(議員)

このたびの提案の内容は、自分が考えていたとおりのものである。1人1人対策が変わってくるのが不登校問題の難しいところである。今の時代ならカウンセリングをLINEですると本音も出てくると思う。生徒の本音をいかにして聞いて対策するかということが一番重要である。

(議員)

オンラインやSNSの活用について、小学校でのオンライン授業は操作も含めてなかなか難しいのではないか。

小中学校の不登校生徒だけの学校学級の設立という提案について、姫路市は規模が大きいため、子どもたちの通いやすい距離ということも併せて考える必要があると思った。

オンラインを使えばどこに住んでいてもつながることができるが、通うとなれば移動時間や距離も考える必要がある。

(議員)

提案の中で、保健室登校を許可制とした理由を聞きたい。申請する手間が、子どもたちにとって負担になり、追いつめられていくことにならないのか。

(高校生)

面倒くさいから行きたくない、というような人を弾くために設けた。申請自体は定期的に三者面談を行い、そのときにできればと考えている。

(議員)

不登校にはいろいろな理由があるが、いじめによる不登校だけは絶対にあってはならない。ただ、それ以外の原因に対して過保護にする必要はないのではないか。

最低限の教育は受けて、義務教育を卒業したら自由にそれぞれが好きなことをする。社会全体も大らかな気持ちで認めるべきである。そういう意味では、学校に来られないならオンラインで勉強してというようなことまで必要ないのではないか。

(議員)

素敵な資料であるし、特に皆さん自身が作ったことが大事である。こういうものを意見として言っていくと変わっていくこともあると思う。

学校には楽しく行くことが将来の自分にとっても保護者にとってもいいことである。勉強はYouTube等でもできるが、人と一緒にいて人のことを考えることは必要なので、人と関わる場が学校であればいいと思う。

不登校の相談を受けるが、本人も保護者も目の前のことに必死である。しかしながら、ずっとそうではなく、環境が変わっていくので、社会の中で居場所を見つけることが大事だと思いながら相談を受けたり活動をしている。

せっかくの機会なので、学校で何が楽しいのかについて、学生の皆さんに是非聞きたい。

(高校生)

授業は面倒くさいと思ったりもするが、放課後に吹奏楽部で、同じ音楽の趣味を持つ仲間と一緒に演奏したり聴いたりするのが楽しい。

(高校生)

一番大きいのは友人関係である。友人関係がこじれたら学校もしんどくなるし、勉強も両方成り立たなくなるのは実感する。

(議員)

結局、子ども同士、学生同士で解決するのが一番のポイントだと思う。「みんなで学校行こう」というように思える支援を増やしていきたいと思う。

(委員長)

議員の話聞いて、何か思うところはあるか。

(高校生)

先ほど「思い切り泣ける、弱音を吐ける環境作り」

を提案したが、それに関してどのような環境がいいと思うか。

(議員)

学生時代に一番泣いて、今でも覚えているのは部活動である。部活仲間がいて、みんなが泣いているから泣くというのは重要だと思う。具体的に言うと、学園祭など誰もが達成感を覚えることを本気でやってみる。今はそのようなことをやめようという流れになっているが、子どもたちがやりたいということを応援できたらいい。

(議員)

泣くということと弱音を吐けるということはほぼ重なっている。自分のほうからアウトプットができて、それを受け止めてくれる人がいる環境というのは本当に必要だと思う。

時代とともに世の中の当たり前が変わってきている。一昔前は中学校を卒業したらほとんどが就職していたが、今は高校を出たら大学や専門学校に進むのが当たり前になっている。そうすると、自分のやりたいこととマッチしないことで、世の中の当たり前に合わざるを得ない環境に無理やり押し込められて、自分の言いたいことが親にも学校にも伝えられない。本当に自分がしたいことを素直に選択できない時代になっている。

社会の常識の中で子どもたちの本当の思いを言える環境、それが親にも学校にも言えないなら第三者に言える器づくりをすることが大事だと感じる。

(議員)

苦しいときに自分の思いを理解してくれる人がいる環境というのが泣くことのできる環境だと思う。カウンセリングや相談にしっかりと力を入れて制度を整え、弱音を吐けて自分のことを理解してもらえ人がいる環境を作っていくことが大事である。

(議員)

泣くことのできる環境をつくるに当たり、話を聞く相手は誰になるのか。例えば担任の先生やクラブの先生であったり、あるいは学校のスクールカウンセラー、もちろん親であったりもする。誰に助けを求めていくのかという点では、いろいろな人が手助けできる状態をつくっていくべきである。

また、不登校の子どもたちの居場所として、市が設

置する適応教室や民間のフリースクールもあり、たくさん受け皿を整えていくということはこれからも必要である。

(議員)

適応指導教室やフリースクールに対してどのように感じているのか教えてほしい。

(高校生)

適応教室やフリースクールとはどういうものなのか。

(議員)

市が設置しているものが適応教室で、民間で行っているものがフリースクールである。フリースクールは、法律上は学校として認められていない。

(高校生)

塾や児童センターのようなイメージがある。勉強時間も短いような気もして、勉学に追いつけるのか不安である。

(議員)

勉強の遅れに関しては難しいところがある。学校に行けなくなった生徒たちをケアするには、適応教室やフリースクールに来てもらわないと難しい。そのため、まずは来てもらうために負担を少なくしようと考えているのではないかと思う。

学校とフリースクールの連携は難しい。オンライン授業というのも選択肢として出てきているが、基本としては学校に来てもらうことが重要だと考えている。

(委員長)

姫路女学院高等学校の提案の中で紹介された、不登校になったが現在は学校に通っている生徒について、別室登校から始めてどのタイミングで普段どおり学校に通えるようになったのか。

(高校生)

友人関係には困っていなかったのですが、友人が家にプリントを届けてくれるなどして、失った期間の勉強を取り戻したことで学校に戻りやすかったと思う。

(委員長)

授業を配信で行うという提案があったが、オンラインで配信があるならば学校に行かなくていいと思うのか、それでも学校に行きたくて授業を受けたいと思うのか教えてほしい。

(高校生)

学校に行ったら人との関わりもあるので、友人関係で困っているのならオンラインのほうが良いという人もいると思うが、普通に生活していく中では対面授業のほうが良い。

(高校生)

オンラインだと通信環境の問題があったり、面と向かって話もできないので対面授業のほうが良い。

(高校生)

小学校や中学2年生までは対面授業のほうが良い。小学校や中学校の低学年は勉強以外にも協調性や学問以外のことを学ぶことに大きな意味があると思う。受験を控えた中学3年生や高校生になるとほとんど勉強する場になると思うので、オンラインでも良いのではと思う。

(委員長)

提案の中に「軽い言葉がけをしない」とあるが、どういうものが軽い言葉がけだと考えているのか。

(高校生)

不登校の生徒に対して、何も事情を知らないのに「大丈夫だよ、行けるよ」というように言うのはかえってプレッシャーになると考えている。

(委員長)

学校教育について、社会で生きていく上で必要な素養や社会性を身につけ、社会的な自立ができるのであれば、学校に行くこと自体が必要なのかどうか。意見を聞いてみたい。

(高校生)

社会に出るために必要な社会性等があれば、学校に通う必要はないと考える。社会性や学力が備わっているのに卒業まで数年間学校に通わないといけないというのが逆にプレッシャーになる。むしろ、自分が進みたい道に早く進ませてあげることが本人のためになる。

(議員)

私も同じ意見である。ただし、義務教育についてはやはり学校に通って、大勢の中で一緒に勉強するというのが大事だと思う。不登校の生徒についてはサポートしないとイケない。

(高校生)

信頼できる人間関係をつくり上げていくという点で学校への登校は必要だと考える。先ほどの提案にあ

った「思い切り泣ける環境作り」も自分から悩みを打ち明けられる信頼できる人がいることが前提となる。そのため、義務教育でそのような信頼できる人間関係をつくるのが重要だと思う。

(高校生)

社会の感覚として必要なものを学ぶことができたから学校に行かなくてもよいというが、その基準が分からない。中学校、高校でもそのときによって悩みが変わったり、人間関係が変わってきたりするので学校に通うことが大事だと思う。

(委員長)

いろいろな意見を交わして、我々議員にとっても勉強になる貴重な機会だったと思う。市の担当とも話をしながら、不登校児童を含めて誰1人取り残されることなく質の高い教育が受けられるようになることを期待する。

## ○ 共通テーマ

### ・議員や議会の役割

「議員って何をしている人なんですか？」

(委員長)

学生の皆さんから議員に聞いてみたいことはあるか。

(高校生)

「議員の数が多すぎる」という意見について、どのような問題があるのか。

(議員)

議員定数や報酬について本当に必要なのかという議論は多くなされているが、実は姫路市でも議員定数は47人から45人に減っている。その45人が適正かというのはこれからも議論になっていくと思う。

(議員)

議員定数についての一番の問題は経済的なことだと思う。議員が100人いれば幾らかかり、そんなに大勢必要なのか、ということが根本的にあると思う。

姫路市全体を良くしていこうと議論をするならば、53万人全員が集まって議論して決めるのが一番いいが、それは物理的にできない。そのために代表を選ぶということで、今は45人になっている。

姫路市の議会費は年間で10億円かかっている。それだけかけて議論するのがいいのか、もっと減らせない

のかという議論がこれからも出てくると思う。私は議員の人数は多いほうが良いというふうに思うが、多すぎてもいろいろな意見が出すぎるし、コストもかかる。45人もいるがその半分でも良いのではないかという意見を持っている人もいます。

**意見交換終了** 11時35分

**副委員長挨拶** 11時36分

**閉会** 11時38分